

バイオ系学生のキャリアサバイバル

木瀬 理恵



「私は本当に研究者になりたいの？」

博士課程に進学したものの、このまま研究者としてやっていくのか？他の道を探したほうがいいのか？博士課程2年になってもその後の進路を決められない学生でした。「研究者になる！」と日々研究に打ち込む他の博士の学生や、すでに社会人になり一人前に仕事をして社会で活躍する元同期を見ては、「自分は何がしたいんだろう？自分に何ができるんだろう？」と、20代後半で何者にもなっていない自分に焦っていました。結局、博士課程を単位取得退学し「もう二度とラボのベンチワークには戻るまい」とそれまでのプロトコル集などをすべてを処分してラボを後にし、商社の営業として文系就職しました。それから12年後、アメリカでバイオ企業のラボテクニシャンとして働き始めました。40半ばの今、シニアリサーチアソシエイトとして日々ラボワークに追われる毎日を送るとは、プロトコルを処分した頃の私は夢にも思っていませんでした。

日本で博士課程単位取得退学、研究論文なし、実績なし、アメリカの大学院も行っていません。それでも現在アメリカでグローバル企業の研究員として働いている私のキャリアは、キャリアデザインよりもキャリアサバイバルとよんだほうがしっくりきます。私が学生だった時は、「アメリカの企業で研究者として働く」ことの可能性すら考えませんでした。海外で企業の研究者として働いた経験のある人を一人でも知っていれば、選択肢の一つとして考えていたかもしれません。

今回、バイオ系キャリアデザインの中の特別企画「バイオ系の海外就職指南」ということで、あの当時の私のように今後のキャリアパスに悩む若い研究者の方に、「研究者にならなくても今までの知識や経験をいかす仕事はある」「アメリカ企業で研究者として働くこともありかもしれない」とキャリアの可能性を広げてほしく、私の日本でのキャリアとリアルなアメリカ企業就職について書いてみたいと思います。

「研究者にはならない」でも何ができる？

「私は研究者として勝負できないな」と感じたのは、初めて参加した国際学会で、年配の海外女性研究者が興奮気味にポスターを次から次へと見ては、発表者を質問攻めに行っている姿を目にしたときです。研究に対する情熱のレベルが違いすぎる。「これを解明したい！これを知りたい！この研究をして世の中の役に立てたい！」という熱い思いがない。私はサイエンスも実験も好きだけど、突き詰めると研究にはそれほど興味が無いのでは？ずっと先延ばしにしていた「私は本当に研究者になりたいのか？」という問いへの答えはあっさりが見つかりました。研究者にならないと決めたはいいけれど、何ができる？そもそも博士課程の理系女子に就職先が見つかるの？悩みはつきません。自分自身のやること探しとは別の想いもありました。その当時の私は不幸な事故で幼い姪を亡くしたばかりでした。「今生きているこの時代のサイエンスの行く先を見て、いつか彼女にこんな世の中だったよ」と教えてあげたい。彼女が見るはずだった世の中をできるだけ広く見たい。研究者ではなくても、サイエンスの周りで仕事がしたい。そんな思いから就職先を選んだのは、バイオ企業や商社での科学先端機器の営業&マーケティングの仕事です。

運とタイミングと少しの熱意の文系就職

博士後期課程2年の終わりから学士や修士の学生に混じって、新卒として就職活動をしました。前例がないから、どうせやっても無駄、常識的に絶対に無理と言われても、やってみるまで結果は分からない、と書類を送ってみるものの、まったく手ごたえがない日々が続きました。応募しても筆記試験さえ受けさせてもらえない。そんな中なんとか面接によばれても、20代後半の女性、しかも博士課程の学生の文系就職にはマイナスイメージがつきまといまいます。ある会社では、筆記試験の案内がなかなか来ないので、人事宛に自己PRのメールを書いたこともあります。そのメールの返信で翌日の筆記試験の

案内が送られてきました。会場に着くと一席だけ余分につくられた席があり、それが私の席でした。その筆記試験をパスして面接を受け就職した会社が日立ハイテクノロジーです。ちょうどSNPタイピング装置などのバイオ関連機器の輸入や新規事業立ち上げに力を入れており、バイオ関係のバックグラウンドをもつ人材を探しているタイミングでした。タイミングは良くても、あの時、人事宛にメールを書かなければ筆記試験さえ受けていなかったかもしれません。就職活動は運とタイミングというものの、ほんの少しの熱意が運を引き寄せ、結果を変えることがある。世間一般には無謀と言われても自分でやってみるまでわからない。「どうせ理系の博士課程の女子学生に文系就職なんて無理だから」と自分で勝手に諦めていたら、今とはまったく違う人生を送っていたでしょう。当たり前ですが、入社すると新人社員の中では最年長。4年生卒の同期は5歳下、修士卒の同期は3歳下。まだ新人歓迎パーティなどもしていた頃で、若い同期と一緒にピンクレディの振り付けを必死になって覚えたのは良い思い出です。

サイエンス×ビジネスの可能性

入社後は新事業開発本部に所属し、SNPタイピング装置などの輸入品の解析装置の営業とマーケティングを担当しました。入社して1年目の終わりか2年目になる頃から、アメリカのボストンやサンディエゴ、オーストラリアのブリスベンなどへ海外出張に行き、外国人と働くことや海外のオフィスの雰囲気に触れる機会がありました。海外のバイオベンチャーでは、Ph.DとMBAの両方を持つ人はめずらしくありません。博士のサイエンスの知識や専門性がビジネスの場で必要とされているのを見るのは新鮮な驚きでした。その当時、取引をしていたあるバイオベンチャーのCEO（もちろんPh.DとMBAを持っている）は、そのバイオベンチャーを売却して、今はベンチャー企業への投資会社を経営しているとのこと。サイエンスとビジネスの組合せの可能性を目の当たりにした時に「博士課程を単位取得退学したのはもったいなかったかな？」と少し後悔しました。

渡米直後の無力感

7年勤めた日立ハイテクノロジーを退職して、当時アメリカで働いていた夫と暮らすために34歳で渡米しました。渡米前「英語は何とかなるだろう」という甘い期待は、渡米してすぐに「英語がまったく分からない」という焦りと恐怖に変わりました。渡米前のTOEICは800



コミュニティカレッジ時代に幅広い年齢の学生と参加したフラワーアレンジメントの学会にて（著者右）

点ぐらい、海外とのやりとりで英語を使っていたので、さすがにまったく分からないことはないだろうと思っていました。でも現実には、スーパーで話しかけられても何のことかわからない、ご近所さんの挨拶の英語がわからない、電話で英語をしゃべるのが怖い。もう英語を聞きたくない、知らない人に話しかけられるのが怖い。日本では自立した大人として当たり前にできたことが、アメリカではできない。「この先アメリカで一人の自立した大人として生きていけるのか？」渡米してすぐは、とてもアメリカで働いている自分の姿を想像できませんでした。

とりあえず、コミュニティカレッジのESL (English as a second language) で英語を学ぶ一方で、これからアメリカで何ができるのか途方にくれていました。一度挫折した博士への再挑戦を考えなかったわけではありません。でも博士課程の大変さを知っているからこそ、逆に本当に自分が学びたいこと、やりたいことでない限り、博士課程は乗り切れないだろうと博士課程への進学はやめました。結局ESLを卒業した後は、実家の祖父母が農家だったので植物を育てることに興味を持ち、園芸学とランドスケープデザインをコミュニティカレッジ（アメリカの2年生の専門学校）で学びました。コミュニティカレッジを3年かけて卒業、その間に2度アメリカ内で引越し、卒業直後に息子を出産しました。ESLとコミュニティカレッジに通った期間は、「私でもアメリカ社会でやっていける」と自信を取り戻す準備期間になりました。ポストドクで渡米すると、いきなりアメリカ社会での生活が始まります。英語だけは準備しすぎることはありません。生きた英語にできるだけ触れて、渡米直後の「ヤバイ！英語がわからない！」というショックを早めに切り抜けてください。

アメリカの就職活動はコネ。コネがなければ作る！

アメリカでの就職活動のポイントは「コネです」。身もフタもない言い方ですが、ただし、アメリカというコネは、実力で身につけた人間関係のコネです。たとえば、研究室のボスの知り合い、学会で意気投合した研究者など、いわゆるプロフェッショナルな人脈のこと。大学の空きポジションは、まずはその大学の生徒や卒業生ですら奪い合いの狭き門。企業でも公募と言う形をとってはいるけれど、実はすでに知り合いの候補者が決まっていることもよくある話。そんな状況なので、アメリカで職歴もコネもない私は、履歴書とカバーレターを送ってもなしのつぶて。返信さえもらえず大苦戦しました。そこで自力で正社員として就職することは諦め、まずは「派遣社員」として希望の職種に就職することにしました。まずはコネと実績づくりです。派遣会社にいくつか登録し、2回目の面接でDupont Pioneer (現Corteva Agriscience) にラボテクニシャンとして就職しました。博士課程を単位取得退学してから12年のブランクを経て、まさかのラボワークに復活です。

実際にまわりの同僚を見ても、私と同じように派遣社員のラボテクニシャンから正社員のリサーチャーやシニアリサーチャーになった人は多くいます。さすがに博士号をもっている派遣社員は見たことはありませんが、博士号を持っている人の場合は、企業ポスドクを1年経験してから正社員になった人、学生のうちにインターンシップをして学位をとった後に就職活動をして正社員として採用された人が多くいます。就職活動をする前にすでに就職希望の会社となんらかの接点(コネ)を作っておくことが、就職活動を成功させるポイントです。

不採用を個人的なことで受け取らない

ラボテクニシャンをして半年過ぎたころから、今度は社内外の正社員へのポジションへの就職活動を始めました。この時の就職活動もかなり苦戦しました。履歴書を送っても返事がないのは当たり前、いくつものお断りメールを受け取りました。頼みの派遣先の会社は、事業統合などで研究予算を大幅にカット中、募集して面接をしても予算の都合で採用者なし、ということもしょっちゅうありました。条件の良いポジションには数十人から数百人の応募者が殺到することも珍しくありません。就職活動では「採用されないことが当たり前」で「不採用でも個人的にとらない (Don't take it personally)」というマインドで、1年半にわたる転職活動を乗り切り、



Corteva Agriscience 本社入り口 (アメリカ アイオワ州)

2016年8月より Dupont Pioneer (現Corteva Agriscience) でシニアリサーチアソシエイトとして、遺伝子編集食物の開発やダイズの病気耐性遺伝子のスクリーニングの研究に携わっています。

アメリカ企業の働きやすさ

若くても年齢を重ねても働きやすい 私が働いた日本の企業とアメリカ企業では、職種が違うので単純には比べられませんが、私はアメリカ企業の方が「女性が働きやすい職場」だと感じます。今の職場は、バイオ系の研究職で半数弱が女性ということもあり、「女性」であることの働きにくさをほとんど感じません。20代の女性も、50代、60代の女性に対してもプロフェッショナルな一人として対等に仕事を任せられます。女性が働いていることが当たり前であり、特別なことではない。男性の中に女性がいるのではなく、女性も男性も同じように働く。こういう女性として働きやすい環境は、海外で働く大きなメリットの一つです。

他人を尊重する意識が高くマイノリティでも疎外感が少ない グローバル企業であり、世界各国から人が集まっています。私の身近なところでは、フランス、中国、台湾、エチオピア、ロシア、ノルウェー出身の同僚がいます。アイオワ州にある会社のキャンパスには約2000人の従業員がいますが、日本人はおそらく私一人です。完全にマイノリティなのですが、ほとんど疎外感はありません。グローバル企業だからこそ、多様性を認める社員教育や、日ごろから他人を尊重する意識 (Respect people) を社員に繰り返し強調しています。このようなメッセージを社員が共有しているので、マイノリティでも安心して仕事ができる環境があります。海外企業への就職では、その会社の文化やコアバリューをよく理解して、できるだけマイノリティでも働きやすい環境を選ぶほうが、就

職してからのストレスは少ないと思います。

家族優先の意識が強い 「子どもの発表会があるので早めに帰ります」「子どもが熱をだしているので家で仕事をします」と、子どものために会社を休んだり、早退したりする男性社員の姿は特別なものではありません。男性、女性にかかわらず、「仕事よりも家族を優先する」ことは普通のこと。会社というよりもアメリカ社会では男性もできるだけ家族優先という意識が強いように思います。ちなみに正社員になりほぼ3年たちますが、残業したのは数えるほど。一番遅くまで残った日で6時半です。今の会社は、仕事と家庭のバランスがとりやすく、男性にとっても女性にとっても働きやすい環境です。

おわりに

女性としてもマイノリティとしても働きやすいアメリカの職場ですが、アメリカ企業は安定な職場ではありません。正社員になってから企業の統合によるリストラを2回経験しました。昨日まで隣のブースと一緒に働いて

いた同僚が「今までありがとう。今日で最後だから」と自分の荷物を箱にまとめて、そのままリストラ退社したり、元上司がリストラされたりしたこともあります。「次は私かもしれない」アメリカ企業で働くなら、リストラのプレッシャーは避けられません。いざという時のために、今の会社に頼らなくても生きていけるように常に自分のレベルアップを心がけています。

こうして自分のキャリアを振り返って今の私から進路に迷っていた博士課程の私へのアドバイスは、「自分の得意なことを大切に、自分の得意なこと、強みで勝負できるフィールドをできるだけ早く見極めて全力で勝負すること」です。40歳半ばにしてやっと全力で勝負したいフィールドを見つけたので、これを最後のキャリアにするべく、今は会社に頼らないキャリアをつくるためアメリカで準備中です。自分自身をレベルアップしながら、人生を楽しむこと。そんな生き方をこれからの人生で実現したいと思います。

<略歴> 1999年3月 奈良先端科学技術大学院大学博士前期課程修了。2002年3月 奈良先端科学技術大学院大学博士後期課程単位取得退学。同年4月 日立ハイテクノロジーズ入社。新事業開発本部などで営業とマーケティングを担当。2009年3月 同社退社。2014年5月 Dupont Pioneerにてラボテクニシャン。2016年8月～現職。

<趣味> 息子とバスフィッシング、テニス、個人ビジネス